

看護系大学生の領域別実習における不安、達成感、自己効力感の関連

著者名(日)	櫻井 美奈, 中原 るり子, 岸田 泰子, 荒木 亜紀, 西崎 未和
雑誌名	共立女子大学看護学雑誌
巻	5
ページ	7-15
発行年	2018-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003223/

研究報告

看護系大学生の領域別実習における 不安、達成感、自己効力感の関連

Relationships among anxiety, sense of accomplishment, and self-efficacy in nursing students' clinical practicum

櫻井 美奈 中原るり子 岸田 泰子
Mina Sakurai Ruriko Nakahara Yasuko Kishida
荒木 亜紀 西崎 未和
Aki Araki Miwa Nishizaki

キーワード：看護学生、臨地実習、不安、達成感、自己効力感

key words : nursing student, clinical practicum, anxiety, sense of accomplishment, self-efficacy

要 旨

某看護系大学生における実習前後での不安、および実習後の達成感、看護実践への自己効力感（積極的行動、失敗不安）の関連性を明らかにするため、実習前と後に対象者に質問紙調査を行い、以下の結果を得た。

(1) 実習前の状態不安得点が高不安群に属したのは全体の26.5%、超高不安群は69.4%であった。(2) 実習後の状態不安得点が高不安群に属したのは全体の28.6%、超高不安群は24.5%であった。(3) 状態不安得点は実習前に比べて実習後で有意に低下した。(4) 実習後の状態不安と実習後の達成感、実習後の状態不安と積極的行動、積極的行動と失敗不安とに有意な相関を認めた。

以上から、実習前の看護学生の状態不安は高いが、実習後には低下していること、実習後の状態不安が低い看護学生は、実習の達成感や看護実践への自己効力感が高い傾向にあることが分かった。実習を通して看護学生の達成感や看護実践への自己効力感が高まるような教育的支援の必要性が示唆された。

Abstract

A questionnaire survey was conducted with nursing students of a certain university before and after nursing student's clinical practicum in order to clarify the relationships among anxiety (STAI), sense of accomplishment, and self-efficacy (GSES: Proactive behavior, Fear of failure) in nursing practice.

The following results were obtained. (1) Before the practicum, the high score cases of state anxiety were 25.6%, and the specially high score cases of state anxiety were 69.4%. (2) After the practicum, the high score cases of state anxiety were 28.6%, and the specially high score cases of state anxiety were 24.5%. (3) The mean value of the pre-practicum state anxiety significantly decreased than that of the post-practicum state anxiety. (4) After the practicum, between the state anxiety and "Sense of accomplishment", between the state anxiety and "Proactive behavior (GSES)", and between "Proactive behavior (GSES)" and "Fear of failure (GSES)", significant correlations were found respectively.

A significant correlation was observed between post-practicum state anxiety and "Sense of

accomplishment”, post-practicum state anxiety and “Proactive behavior (GSES)”, “Proactive behavior (GSES)” and “Fear of failure (GSES)”.

The above results indicate a post-practicum reduction in the pre-practicum high state anxiety in nursing students. Also the low state anxiety score indicates that students at the post-practicum tend to be high self-efficacy and the sense of accomplishment.

The current results are indicative of the importance of educational support to nursing students that increases sense of accomplishment and self-efficacy in nursing practice obtained through clinical practicum.

I はじめに

看護学生にとって臨地実習は、学生生活の中での大きなイベントであり、乗り越えなければならぬ壁となっている。先行研究においても、実習前の看護学生の不安の高さが報告されている¹⁻³⁾。不安の要因は学習課題だけでなく、実習上での患者・看護師・教員・友人との人間関係も関係しているといわれている^{4) 5)}。実習前や実習中の不安は実習後には低減するという報告^{2) 3)}もあり、青年期にある看護学生が見知らぬ環境の中で新たな体験をすることは、強い精神的緊張を伴い心理的負荷の高い状況であることが容易に想像できる。不安と看護学生の成績とに負の関連があったという報告⁶⁾があり、実習への不安は指導上重要な問題といえよう。

一方、臨地実習は看護師としての実践的な能力の基礎を身につけるためにも国家試験の受験資格を得るためにも不可欠な学習の一つである。Dale⁷⁾によれば、実習などの「直接的な目的体験」は、「経験の円錐」の最下部に位置する重要な学習指導方法とされている。臨地実習における体験は、抽象的な概念を具体的で直接的な体験に変換し、看護の魅力の発見や看護の理解を深めるだけでなく、看護学生の達成感や自信を高め、課題を明確にして、自身の未来像を描くのに役立つと考えられている⁴⁾。実習前後の自己効力感を比較して、直後に自己効力感が高まったという報告⁸⁾は、これを裏付けるものといえる。不安が高ければ実習遂行の結果に否定的な影響を与える一方で、実習経験は自己効力感を高めるなどの肯定的な影響を与えると考えられる。

鎌原ら⁹⁾は、達成感や自信と関連の深い自己効力感に着目して、自己効力感と不安に負の関連がある事を明らかにしている。自己効力感 Bandura¹⁰⁾が提唱した概念で、ある結果を生み出

すために必要な行動を、どの程度うまく行うことができるかという個人の遂行可能感のことを指している。自己効力感が高い学生は不安が低く、さらに実習で達成感を得た学生は看護実践への自己効力感を高めているのではないかと考えた。今回は、主に、実習後の看護学生の不安、達成感、看護実践への自己効力感の関連に着目し調査を行った。本研究においては、領域別実習前後での看護学生の不安の変化、領域別実習後の不安、達成感、看護実践への自己効力感について調査を行い、これらの関連性を明らかにすることで、看護学生の实習体験を量的に捉え、看護学生の实習への支援に繋げたいと考えた。

以上のことから、著者らは、看護実践への自己効力感が高い学生は不安が低く、さらに実習で達成感を得た学生は看護実践への自己効力感を高めているのではないかと考えた。今回は、主に、実習後の看護学生の不安、達成感、看護実践への自己効力感の関連に着目し調査を行った。本研究においては、領域別実習前後での看護学生の不安の変化、領域別実習後の不安、達成感、看護実践への自己効力感について調査を行い、これらの関連性を明らかにすることで、看護学生の实習体験を量的に捉え、看護学生の实習への支援に繋げたいと考えた。

II 目的

看護学生の領域別実習前後での不安の変化、および領域別実習後の不安、達成感、看護実践への自己効力感の関連を明らかにし、臨地実習を支援するための教育的示唆を得る。

III 方法

1. 調査対象者

調査対象者は、3年次10月から4年次7月にかけて行われる成人看護学実習、高齢者看護学実習、小児看護学実習、母性看護学実習、精神看護学実習ならびに在宅看護学実習（以下「領域別実習」と略す）を履修するA看護系大学、20代女子学生87名のうち、研究への同意が得られた62名であった。

2. 調査期間

調査期間は、平成 27 年 7 月 31 日から平成 28 年 7 月 29 日であった。

3. 調査方法

3 年次 7 月に実施された領域別実習オリエンテーション終了時と、4 年次 7 月の領域別実習終了 1 週間後に、無記名自記式質問紙調査を集合調査で実施した。調査場所に投函箱を準備し調査当日に回収を行った。実習前後の調査対象者のデータを一致させるために、調査対象者に、Father (F) か Mother (M) の頭文字と親の誕生日 4 桁などを組み合わせた ID (アルファベット 1 文字と数字 4 桁) を任意で設定するように依頼した。

4. 調査内容

1) 領域別実習前調査

対象者の領域別実習前後での不安の変化を知るために、State-Trait Anxiety Inventory (STAI) の「状態不安」を用いた。STAI は、Spielberger (1970) の、不安を状態としての不安と特性としての不安とに分けて考える「不安の特性・状態モデル」に基づく尺度である。日本語翻訳版 (1982 年) は、原版と同様の高い信頼性と妥当性が得られている¹¹⁾。

「状態不安」とは、緊張や懸念という比較的うつろいやすい感情としての不安である。この尺度は、今現在の気持ちを問う 20 項目 4 件法から構成されており、高得点であるほど状態不安が高いことを意味している。

2) 領域別実習後調査

(1) 状態不安

対象者の領域別実習前後での不安の変化を知るために、領域別実習前調査時と同様に STAI の「状態不安」を用いた。

(2) 実習の達成感

看護学生の実習の達成感に関する尺度 (14 項目) は、先行研究には報告されていなかったために、渡辺ら⁴⁾の研究結果を参考に著者らが作成した。

渡辺らは看護学生が実習で感じる達成感と臨床実践に対する不安について最終実習の前後で質的に検討し、看護学生の実習に対する不安や期待そして達成感の具体的内容を記述した。本調査項目はこの研究結果を参考に、成長や自信、積極的な

行動などの自身の好ましい変化の有無を問う質問項目で構成されている。回答は「全くそうでない (1 点)」から「とてもそうである (7 点)」とする 7 件法で、高得点であるほど達成感が高いことを示している。

(3) 看護実践への自己効力感 (一般性自己効力感尺度 GSES 一部改変)

自己効力感は基本的に、ある具体的な課題に特異的な (task-specific) 期待を問う概念である。しかし、自己効力感個人は個人の行動に長期的な影響を及ぼすことも知られており、一般性自己効力感尺度 (General Self Efficacy Scale : GSES) は個人の行動に長期的な影響を及ぼす特性的な自己効力感の強度を査定するために有効とされている尺度である。GSES は「積極的行動」「失敗不安 (反転項目 : 以後 R)」「社会的位置づけ」の 3 つの下位尺度から構成されており、回答は「はい」「いいえ」の 2 件法で、高得点であるほど自己効力感が高いことを意味している¹²⁾。

看護学実習における自己効力感尺度は、谷山ら¹³⁾によって作成された臨地実習一般に対するものがあるが、その質問項目は、看護学生としての実習課題に対する内容であり、看護実践に対する内容に特化したものではなかった。このことから、本研究では質問内容を吟味した上で、GSES の下位尺度である「積極的行動」の 7 項目と「失敗不安 (R)」の 5 項目を一部改変して用いることとした。具体的には、原文「何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうである」を「看護実践に取り組むとき、自信をもってやれそうである」と看護実践の場面に特化した自己効力感を測定する文面に改変した。回答形式は原文と同様に「はい」「いいえ」の 2 件法とした。

5. 分析方法

自作の質問項目である「実習の達成感」については、主成分分析で尺度の一次元性を確認し、その上で、Cronbach の α 係数の算出し、内的一貫性を確認した。また、項目分析として、天井効果、床効果の有無の確認と、IT 相関分析とを行った。GSES を一部改変した「看護実践への自己効力感」の尺度は、自己効力感の下位尺度「積極的行動」の 7 項目と「失敗不安 (R)」の 5 項目について、尺度の一次元性を確認するために主成分分析を

行った。また、内的一貫性を確認するために Cronbach α 係数を算出した。

分析は記述統計量を算出後、状態不安、達成感、積極的行動、失敗不安 (R) について、それぞれの質問項目得点の総和をもって尺度得点とした。その上で、状態不安の変化を知るために、実習前後の状態不安 (STAI) の得点について対応のある t 検定を行い、尺度間の関係については、ピアソンの積率相関係数を用いて検討した。各検定の有意水準は 5% とした。なお、分析には SPSS ver. 24 を用いた。

6. 倫理的配慮

前後の 2 度の調査において、それぞれ、対象者に文書および口頭にて研究の主旨、および倫理的配慮を説明し、同意が得られた者を対象として質問紙調査を行った。同意できない場合は、調査用紙を未記入のまま提出するよう説明を加えた。学生の精神的影響を最小限にするよう、本研究に参加である場合でも、全く不利益を受けない旨を説明した。調査は無記名であり、分析は個人を特定できない方法で行い、プライバシー保護に努めることを約束した。データおよび結果は、研究と実習指導に関する目的以外に使用しないことを約束し、データの取り扱いには研究者のみが行い、質問紙は鍵つきのロッカーに保管し研究終了後には破棄することとした。

調査に当たっては、事前に研究者の所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得た (承認番号 KWU-IRBA#15076)。

IV 結果

1. 対象データ

実習前後の調査票 ID が一致し、対応の付いたのは 55 名であった。このうち欠損データを除外した 49 名を分析対象とした。

2. 領域別実習前調査の結果

実習前の「状態不安」得点の平均 (標準偏差) は 56.98 (9.00) であった (表 1)。高不安とされる 42 点以上 50 点以下¹⁴⁾ の高不安群の看護学生が 13 名 (26.5%)、非常に高い不安とされる 51 点以上の超高不安群の看護学生は 34 名 (69.4%) であった。

3. 領域別実習後調査の結果

1) 状態不安

実習後の「状態不安」得点の平均 (標準偏差) は 43.47 (8.50) であった (表 1)。高不安とされる 42 点以上 50 点以下¹⁴⁾ の高不安群の看護学生が 14 名 (28.6%)、非常に高い不安とされる 51 点以上の超高不安群の看護学生は 12 名 (24.5%) であった。

2) 実習の達成感

「実習の達成感」の質問項目は自作であり、尺度の次元性を確認するために主成分分析を行った。その結果、14 項目の第一主成分負荷量は最小で 0.51、固有値の寄与率は第一成分で 58.45% となり、尺度の次元性を確認できた (表 2)。項目分析では、14 項目の得点平均値と標準偏差から天井効果・床効果がないことを確認した (表 2)。また、ヒストグラムにおいて回答に大きな偏

表 1 尺度の信頼性係数と記述統計量 (n = 49)

	項目数	Cronbach の α 係数	Mean (SD)	最小値	最大値
実習前					
状態不安	20	0.89	56.98 (9.00)	38	76
実習後					
状態不安	20	0.87	43.47 (8.50)	25	61
実習の達成感	14	0.94	74.61 (11.54)	23	94
看護実践への自己効力感					
積極的行動	7	0.70	3.37 (2.06)	0	7
失敗不安 (R)	5	0.52	2.24 (1.42)	0	5

りがないことを、全ての項目で確認した。設問間の I-T 相関は、いずれも有意な強い正の相関 ($r = 0.64 \sim 0.88$, $p < 0.01$) を示した (表 2)。さらに、信頼性係数の Cronbach の α 係数は 0.94 を確認した (表 1)。

「実習の達成感」の平均値 (標準偏差) は 98 点

満点中 74.61 (11.54) であった。最小値は 23、最大値は 94 であった (表 1)。

3) 看護実践への自己効力感

「看護実践への自己効力感」の質問項目は一部を改変しているため、下位尺度ごとに次元性を主成分分析で確認した (表 3)。

表 2 「実習の達成感」尺度 (14 項目)

項目	負荷量	Mean (SD)	I-T 相関
① 人間的に成長した	0.69	5.57 (0.91)	0.81**
② 看護に関して粘り強く取り組むようになった	0.60	5.55 (0.98)	0.76**
③ 看護に関して精神的に強くなった	0.66	5.45 (1.12)	0.79**
④ 自分のことがわかるようになった	0.79	5.31 (1.03)	0.64**
⑤ 自分自身をコントロールできるようになった	0.64	4.71 (0.84)	0.75**
⑥ 人の気持ちがわかるようになった	0.51	5.33 (0.99)	0.71**
⑦ 人とのかわりに自信が持てた	0.54	5.04 (1.24)	0.74**
⑧ 看護に対して積極的になった	0.77	5.22 (1.06)	0.88**
⑨ 看護に対してやればできると自信がついた	0.54	4.88 (1.09)	0.72**
⑩ 看護に関して考えて行動するようになった	0.73	5.59 (1.14)	0.77**
⑪ 専門的な知識が増え視野が広がった	0.74	5.71 (1.08)	0.84**
⑫ 専門的な技術が向上した	0.68	5.10 (1.05)	0.74**
⑬ 患者と関ることが楽しくなった	0.70	5.73 (1.24)	0.80**
⑭ 指導者からの指導を肯定的に受け止められるようになった	0.62	5.41 (1.35)	0.73**
寄与率	58.45		

** $p < 0.01$, ($n = 49$)

注) 質問項目は以下のようなものであった。

実習を終えた今、あなたの達成感について、該当する番号を○で囲んでください。

(1. 全くそうでない、2. そうでない、3. いくらかそうでない、4. どちらともいえない、5. まあそうである、6. そうである、7. とてもそうである)

表 3 「看護実践への自己効力感」尺度 (12 項目)

no	項目	負荷量
積極的行動		
①	看護実践に取り組む時、自信をもってやれそう	0.50
④	看護実践の技術に関して友人より心配している	R 0.50
⑤	看護実践に必要な技術を決めなければならないとき、迷わずに決定できそう	0.29
⑦	看護実践に取り組む時、引っ込み思案になってしまう	R 0.75
⑧	うまくできるかどうかわからない場合でも、積極的に取り組んでゆけそう	0.57
⑩	看護実践に関してどんなことでも積極的に取り組むだろう	0.59
⑫	看護実践に関して積極的に取り組むのは、苦手だ	R 0.63
失敗不安		
②	看護実践の取り組みに関して過去の失敗や経験を思い出して、暗い気持ちになる	R 0.67
③	看護実践に取り組んだ後、失敗したと感ずる気がする	R 0.61
⑥	看護実践に取り組む時、うまくゆかないのではないかと不安になる	R 0.37
⑨	どうやったらよいか決心がつかずに、看護実践にとりかかれないうかもしれない	R 0.79
⑪	看護実践に関して小さな失敗でも人よりずっと気にするだろう	R 0.59

no: 設問番号、R: 反転項目

注) 質問項目は以下のようなものであった。

看護実践に対する今のあなたの考えについてうかがいます。

以下の文を読んで、当てはまると思う選択に○をつけてください。(はい、いいえ)

(1) 積極的行動

7項目からなる「積極的行動」における第一主成分の負荷量は、1項目のみ0.30以下となった。GSES原文の因子負荷量も0.30～0.7112)と低かったが、重要な項目であると判断したため、このまま残すこととした(表3)。Cronbachの α 係数は0.70であり、平均値(標準偏差)は3.37(2.06)であった(表1)。

(2) 失敗不安の低さ

「失敗不安(R)」の質問は全てが反転項目であり、得点が高いほど失敗不安が低いことを意味している。「失敗不安(R)」の5項目の第一主成分の負荷量は、最小で0.37となり、尺度の一次元性が確認された(表3)。Cronbachの α 係数は0.52であり、平均値(標準偏差)は2.24(1.42)であった(表1)。失敗不安は本調査において重要な変数であるため、 α 係数は低いが、取り扱いに注意しながらこのまま分析で使用することとした。

4. 領域別実習前後での状態不安得点の比較

実習前後の状態不安得点を比較するために、実習前の状態不安得点と実習後の状態不安得点とで対応のあるt検定を行った。結果は、 $t = 8.04$ ($p < 0.01$)となり、実習後の「状態不安」は有意に低かった。

5. 領域別実習後の尺度間の相関係数

尺度間の関係をピアソンの積率相関係数で検討した(表4)。

実習後の「状態不安」と有意な相関を認めたものは、「実習の達成感」($r = -0.40, p < 0.01$)、「積極的行動(看護実践への自己効力感)」($r = -0.33, p < 0.05$)であった。さらに、「積極的行動」と「失

敗不安(R)(看護実践への自己効力感)」とに有意な正の相関を認めた($r = 0.61, p < 0.01$)。

VI 考察

1. 領域別実習の与える看護学生への心理的負担

今回調査した看護系大学生の実習前の状態不安得点の平均値(標準偏差)は56.98(9.00)であった。先行研究¹⁾で示されているように、領域別実習というイベントを前にした本調査対象は、不安がより高い状態の集団であることが確認された。今回の研究では、実習前の高い不安は、実習後に有意に低下し、実習終了時には低減することが示された。

重岡ら²⁾の研究では、臨地実習前と実習後とで看護学生の状態不安は、平均値が61.0から47.6へと有意に低下しており、本研究も同様の結果を示していた。飯出ら³⁾も領域別実習前後で看護学生の状態不安が低減したと報告しており、そこで示された実習前の不安の内容は「怖い教員・指導者か心配」「(実習記録が)大変そう」「コミュニケーションがとれるか不安」「漠然とした不安」などの予期不安であった。本研究の研究対象者についても、実習前には「17週間、9科目について、実習施設という普段とは異なる環境の中で受持ちを担い、看護を展開しながら課題を遂行する」という未経験の事柄に対する予期不安の高さが状態不安得点の高さに表れ、実習終了後にはその不安が解消され状態不安得点が低減したと考えられた。

2. 実習後の「状態不安」と「実習の達成感」との関連

実習後の「状態不安」と「実習の達成感」とに

表4 領域別実習後調査の尺度間の相関係数 (n = 49)

	実習後 状態不安	達成感	自己効力感 積極的行動	失敗不安(R)
実習後状態不安				
実習の達成感	-0.40**			
看護実践への自己効力感				
積極的行動	-0.33*	0.28		
失敗不安(R)	-0.21	0.07	0.61**	

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

は負の相関 ($r = -0.40, p < 0.01$) が認められた。相関分析は関係の検討であるため、因果関係については明らかではないが、「状態不安」が低いために「実習の達成感」が高くなったと考えるよりは、実習で達成感を得たために「状態不安」が低減したと考える方が順当だろう。前項で述べたように、状態不安が予期不安によって生じているのであれば、実習が終了することで状態不安は低減するはずである。「気持ちが良い」「自信がある」「満ち足りた気分だ」「何か嬉しい気持ちだ」「気分が良い」などの反転項目からも構成される STAI と、成長や自信、積極的な行動などの自身の好ましい変化の有無を問う質問項目で構成されている達成感の尺度とは、相反関係にあったと推察する。

一般に、課題に対する評価が重要であればあるほど状態不安は高まり、課題の遂行を妨害するとされている⁹⁾。実習課題を円滑に遂行するために、状態不安を低減することは重要である。不安軽減への直接的な関わりと同時に、不安を低減する可能性のある実習の達成感を高めるための教員の看護学生への関わりも求められていると考えられる。

3. 実習後の「状態不安」と「積極的行動」との関連

実習後の「状態不安」と自己効力感の「積極的行動」とには弱い負の相関 ($r = -0.33, p < 0.05$) が認められた。本研究では実習前後での自己効力感を測定しておらず、また、両者の因果関係について言及できないが、鎌原⁹⁾は「自己効力感」が「状態不安」に影響を及ぼすというモデルを提示し、Diaz ら¹⁵⁾は同様なモデルを検証している。状態不安が低くなったために、看護実践に対する自己効力感（積極的行動）が高まったという解釈も成り立つが、鎌原や Diaz らが示したように、何らかの理由で自己効力感（積極的行動）が高まったことにより、状態不安が低減された可能性も考えられる。

4. 「積極的行動」と「失敗不安 (R)」との関連

看護実践への自己効力感の「積極的行動」と「失敗不安 (R)」に、やや強い相関 ($r = 0.61, p < 0.01$) が確認された。一般性自己効力感尺度

(GSES) は、「積極的行動」「失敗不安 (R)」「社会的位置づけ」の3つの下位尺度からなる尺度で、自己効力感という同じ概念を違う3つの側面から測定しているため、当然ながら下位尺度間には相関関係が認められる。

5. 教育的示唆

本研究の結果は、これまでの研究と同様に、看護学生の実習前の不安は著しく高く、そして実習後には不安は軽減することが示された。不安や緊張が高まる実習がなくなったことが影響していると考えられるが、実習の達成感や看護実践への自己効力感と状態不安が関連していたことから、鎌原⁹⁾や Diaz ら¹⁵⁾が示したように、看護学生は実習を通して何らかの達成感を得て、看護実践という課題に対する自己効力感を高め、不安を低減した可能性も考えられる。

自己効力感とは、自分に関わる出来事は、自分でコントロールできるとする統制感や努力しようとする態度にも影響を及ぼすと言われている¹⁶⁾。本研究では、不安の低減という段階までしか検討できていないが、自己効力感は今後の看護実践への意欲とも関わる概念であると考えられる。そのため、教育側は看護学生が達成感を得られるよう実習において介入し、看護実践への自己効力感が高まるよう支援する必要があることが示唆された。

教育的介入を考える上で、自己効力感の4つの促進要因¹⁰⁾を意識しておく必要がある。「遂行行動の達成」においては、教示しながら学生と共に看護を実践しモデルを示すことや適切な目標設定を助け目標達成の成功体験を繰り返させること、「代理的経験」においては学生に看護実践のモデルをみせたり、体験談を聞かせたりしてイメージを与えること、「言語的説得」においては、示唆や励まし、自己教示を行うこと、「情動喚起」においては、リラクゼーションや自己の気づきを高めるなどの介入を併せて行い、看護実践の自己効力感が高まるような関わりを心がけると効果的だと考えられる。

原田¹⁷⁻¹⁹⁾は、臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因には、高い順に「患者との関わり」「グループメンバーとの関わり」「臨床指導者との関わり」「教員との関わり」「既習学習」「自分自身」であったと報告している。教員は、看護

学生の気付きや変化に目を向け、遠い大きな目標ではなく、近い小さな目標を設定することを助け、「できた」ことに注目し、頑張りを評価し励ますことを忘れず、看護学生が成功体験を積み重ね、達成感を得られるようサポートしていくことが必要である。その結果、看護学生の自己効力感が高まり、不安の低減も期待できると考えられた。

6. 研究の限界

本研究は、都内のA看護系大学生のみを対象に調査されたものであり、看護系大学の学生の特徴として一般化できるものではない。また、自作の「実習の達成感」尺度と改変の「看護実践への自己効力感」尺度については、尺度構成法の手順を踏んでおらず、尺度の検討が十分とは言えなかった。「実習の達成感」においては、 α 係数は0.94と高く、内的一貫性を確認することはできたが、実習の達成感を測定できていたかどうかの妥当性の検討が不十分であった。また「看護実践への自己効力感」については、主成分分析の結果では、負荷量が0.3未満の項目もあり、 α 係数が0.6未満もあった。原尺度のGSES自体の主成分分析の結果とは近似していたが、原尺度は特性の自己効力感を測定するものであり、今回は「看護実践」に特化した自己効力感を測定しており、設問項目の改変が影響したことも考えられ、構成概念の妥当性を十分に検討する必要がある。したがって本調査結果の解釈には慎重を要する。今後は、二つの尺度について信頼性と妥当性の検討が必要である。

研究デザインでは実習前後の調査用紙について、変数を一致させて調査することができておらず、実習前後の学生の自己効力感の変化を明らかにするまではできていない。今後は研究デザインや調査用紙の精度を上げ、看護学生への臨地実習での達成感と自己効力感、さらには実践意欲との関連について調査を行う必要がある。

V 結論

都内A看護系大学の大学生49名を対象に、領域別実習前と領域別実習後に質問紙調査を行った。実習前調査では状態不安を、実習後調査では、状態不安、実習の達成感、看護実践への自己効力

感を調査した。尺度間の関連を検討した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 領域別実習前の看護学生の「状態不安」得点の平均(標準偏差)は56.98(9.00)であり、高不安者は13名(26.5%)、超高不安者は34名(69.4%)であった。
- 2) 領域別実習後の看護学生の「状態不安」得点の平均(標準偏差)は43.47(8.50)であり、高不安者は14名(28.6%)、超高不安者は12名(24.5%)であった。
- 3) 「状態不安」得点は領域別実習前に比べて実習後で有意に低下した。
- 4) 領域別実習後の「状態不安」と「実習の達成感」、「実習の達成感」と「積極的行動(看護実践への自己効力感)」、看護実践への自己効力感の下位尺度の「積極的行動」と「失敗不安(R)」とに有意な関連性が認められた。

引用文献

- 1) 櫻井美奈, 中原るり子, 岸田泰子, 他: 新設A看護系大学生の領域別実習前における心理社会的状況の検討, 共立女子大学看護学雑誌, 3(3), 38-48, 2016.
- 2) 重岡秀子, 池本かづみ, 石崎文子, 他: 成人看護学実習前・後における学生が感じるストレス感情と不安状態の実態, 健康科学と人間形成, 2(1), 17-26, 2016.
- 3) 飯出美枝子, 三木園生, 澁谷貞子: 実習前後の看護学生の不安の変化について—STAIXを用いての分析—, 桐生短期大学紀要, 16, 65-69, 2005.
- 4) 渡辺千枝子, 垣内いずみ, 嶋崎昌子, 他: 看護学生が実習で感じる達成感と臨床実践に対する不安—最終実習の前後における期待と体験に焦点をあてて—, 松本短期大学研究紀要, 23, 77-82, 2014.
- 5) 前川利枝, 大石ふみ子, 櫻井しのぶ: 看護学生のはじめての臨地実習に対する思い, フォーカスグループインタビューによる分析, 三重看護学誌, 8, 131-136, 2006.
- 6) 中山和美, 寺田真廣, 星山佳治, 他: 看護学生の長期実習前後の心理変化と実習成績の関連に関する研究, 昭和医学会誌, 66(1), 29-37, 2006.
- 7) Edgar Dale: Audio-visual Methods in Teaching, 3rd ed., p 107. Dryden Press, Holt, Rinehart Winston, Inc., 1969.
- 8) 永谷実穂: 臨地実習における自己効力感の変化に関する研究, 静岡県立大学短期大学研究紀要, 24,

- 1-12, 2010.
- 9) 鎌原雅彦：第4章 セルフ・エフィカシーの評価，坂野雄二，前田基成 編，セルフ・エフィカシーの臨床心理学，北大路書房，京都，38-39，2002.
 - 10) Albert Bandura: Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change, *Psychological Review*, 84(2), 191-215, 1977.
 - 11) 中里克治，水口公信：新しい不安尺度 STAI 日本版の作成，*心身医学*，22，107-112，1982.
 - 12) 坂野雄二，東條光彦：一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み，*行動療法研究*，12，73-82，1986.
 - 13) 谷山牧，甲斐一朗：看護学生を対象とした臨地実習自己効力感尺度の作成と評価，*日本看護教育学会誌*，22(3)，13-22，2013.
 - 14) 水口公信，下仲順子，中里克治：日本版 STAI Form X 使用手引（増補版），p 12，三京房，京都，2012.
 - 15) Rolando J. Diaz, Carol R. Glass, Diane B. Amkoff, et al.: Cognition, Anxiety, and Prediction of Performance in 1st-Year Law Students, *Journal of Educational Psychology*, 93(2), 420-429, 2001.
 - 16) 鎌原雅彦：前掲書)，33-35.
 - 17) 原田秀子：臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討，*山口県立大学看護学部紀要*，8，93-98，2004.
 - 18) 原田秀子，張替直美，中谷信江 他：臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の分析（第2報），*山口県立大学看護学部紀要*，9，49-56，2005.
 - 19) 原田秀子：臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の分析（第3報）——4年次学生に対しての縦断調査を通して——，*山口県立大学看護学部紀要*，10，29-37，2006.